

奨励賞

地域の一員として主体的に防犯活動に取り組む子どもの育成 ～5年生総合的な学習の時間「よりよくしよう私たちの街 桜井」の実践を通して～

愛知県安城市立桜井中学校（前愛知県安城市立桜井小学校）

いしかわ かずゆき

石川 和幸

実践の概要

愛知県安城市桜井地区は、昔からの変わらぬ風景が残る地域である一方、近年、都市再生整備計画事業で住宅地が急激に増えている。平成30年に安城市で起きた犯罪の一覧では、住宅対象侵入盗が市内でワースト1という不名誉な記録が残っている（安城警察署より提供）。しかし、児童の意識調査からは、昔ながらの安全な街であるという意識が根強くあることが分かった。地域の未来を担う子どもたちが桜井の安全について興味・関心をもち、自らの手でふるさとの街を守っていこうという意識を高め、主体的に行動できるようにすることを期待し、本研究に着手した。

論文内容の紹介

1 研究の実際

(1) 防犯に関心を高める段階（気付く）

意識調査の中から、子どもたちの「防犯」の意識の中に「不審者への対応」が大きいことが分かった。まず、安城警察署から借りた「BO-KEN あいち」という防犯体験プログラムの映像等をもとに基本的な不審者対応の仕方や危ない場所について学んだ。

次に、子どもたちがよく利用する学区の公園へ、防犯調査活動に出かけた。グループに一つずつタブレットを用意し、危険な場所の写真を撮った

り、どのように危険なのかをタブレットに書き込んだりしながら調査活動を行った。普段利用している公園にも人目に付きにくく、危険な場所が多くあることに気付いた。



(2) 学んだことを発信する段階

（考え・行動する）

公園の防犯調査活動で得た情報をもとに、特に危険だと感じた場所についてグループで話し合い、子どもたちが作成した公園の地図上に付箋を貼っていった。トイレの裏や背の高い草が茂っている場所など、周りから見えにくい場所に付箋が集中し、どの公園にも危険な場所が幾つかあることが分かった。この活動で、学区にある大きな公園ほぼ全ての安全マップを作成することができた。

子どもたちからは、今まで学んだことを下級生や地域に向けて発信したいという意見が出た。そこで、「防犯フェスタ」という行事を開催し、下級生や地域に向けて発信活動をする場を設けた。この行事の開催の準備にあたり、安城警察署から現役の警察官を講師として招き、発表内容についてアドバイスを受け、よりよいものを作り上げていった。



(3) 自分たちにできることを主体的に考え行動する段階（地域の一員として、さらなる主体的な行動をする）

下級生や地域に向けて発信活動をし、子どもたちに「やり切った感」が生まれたところで初めて、「桜井は住宅侵入盗（空き巣）が安城市で一番多い」という資料を提示した。子どもたちは、このままではいけないと、自分たちにできることを主体的に考え始めた。ここでも、警察官を講師として招き、住宅侵入盗の特徴や防犯対策について教えていただいた。

話し合いの結果、防犯対策で重要なことをチラシやポスターで地域に呼びかけることになった。子どもたちが作ったチラシやポスターは、町内会長と連携し、回覧板で回したり地域の掲示板に掲示をしたりして、桜井学区全体に防犯を呼びかけた。



2 | 成果と課題

令和元年の犯罪発生率の調査では、桜井地区の犯罪を大幅に減らすことができた。子どもだけでなく、町内会や警察など、地域が一体となった防犯活動の成果の現れた実践となった。

本実践では、下級生や地域への発信活動の後には住宅侵入盗の資料を提示したが、そこではやや意欲の低下が見られた。新たな課題や資料と出合わせるタイミングについては、常に試行錯誤していく必要性を感じた。

奨励賞

愛鳥を学校の伝統から 学区の文化へ ～生平小学校3年間の取組～

愛知県岡崎市立生平小学校

い な よ し あ き
伊奈 良晃

実践の概要

生平小学校で、38年に渡って継続されてきた愛鳥活動。本校にとって伝統的な取組である。しかし、近年の児童数減少により、その活動の縮小を余儀なくされてきた。そこで、この活動を学校の伝統に留めるのではなく、学区の文化として確立させることで、継続・発展させていきたいと考えた。そのための具体的な方策として、児童による活動内容の精選、野鳥の楽園「バードピア生平」設立を通じた地域との協働などの取組を進めた。

論文内容の紹介

1 | 児童が主体的に取り組む愛鳥活動 ～平成30年度の取組より～

〈復活した愛鳥委員会による活動の再構築〉

愛鳥活動の再生のために、愛鳥委員会を復活させ、愛鳥委員主導で活動が停滞している理由を分析、必要な働きかけについて話し合い、以下のような取組を始めた。

- ①校内に飛来する野鳥の特徴などが一目でわかる資料を作成、掲示し、最低限の知識が身に付くようにする。
- ②観察した野鳥の記録用紙（ウォッチングカード）を簡略化するとともに、日課の中に愛鳥活動に充てる時間を確保する。

- ③野鳥の知識を定着させる目的で行う野鳥検定の内容や実施の方法を改定し、頑張りを評価に結び付ける。

〈活動の見直しを目的とした評価の導入〉

自分たちの取組の適切さを判断するための材料として、以下のような取組を行い、活動についての評価をした。

- ①各種発表会に積極的に参加をする。
②本校と同様に、愛鳥活動に継続して取り組んでいる学校との交流会を行う。

2 | 学校と地域が協働して進める愛鳥活動 ～平成31年度の実践より～

〈野鳥が集まる魅力的な裏山づくり〉

前年度の取組によって高められた意欲も、実際に野鳥を見られないのでは持続しないとの考えから、野鳥がたくさん集まる環境づくりを進めることにした。

- ①人工池「ふるさと池」の改修

愛鳥委員、5年生児童が中心となり、学校北側の「ふるさと池」を改修し、カワセミを呼び込もうと活動を進めた。

- ②野鳥の楽園「バードピア生平」の設立

愛鳥委員、6年生児童が中心となり、ふるさと池周辺への植樹や給餌台の設置、巣箱の架設などを行った。また、バードピア生平サポーターを募集し、力仕事や高所での作業を学区の方をお願いした。

3 | 学区の文化としての愛鳥活動 ～令和2年度の取組より～

〈コロナ禍での生活だからこそその気付き〉

今日、初めてサンコウチョウの声を聞きました。今まで探鳥会に行ってもほとんど聞くことができなかったのに、自分の家にいて聞けるなんてびっくりしました。(6年児童)

コロナ禍での自宅滞在は、期せずして野鳥が身近にいることを再認識させ、人間と野鳥の関わりについて考える契機になった。

4 | 課題と成果

今回の実践では、愛鳥委員の目線で愛鳥活動の見直しを進めたため、子供たちの実態に即した活動を構築し、活動意欲を十分に向上させることができた。そして、外部からの評価を取り入れることにより、自分たちの活動に自信と誇りをもてるようになったと感じる。その半面、地域との協働という点では、まだ道半ばである。今後の実践を通して、愛鳥活動が学区の文化となるようにしていきたい。

奨励賞

しなやかに未来を生き抜く
ための力を育む音楽づくりの
指導の工夫
～実感を伴った理解につながる体を
動かす活動を通して～

茨城県つくば市立春日学園義務教育学校

菊池 康子

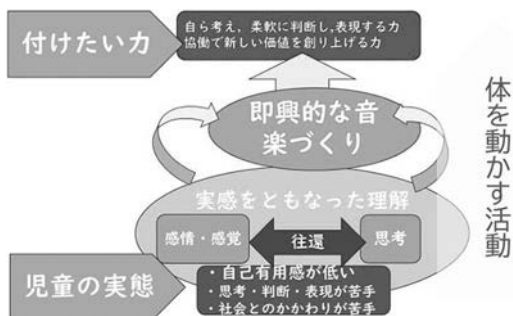
実践の概要

未知の世界を生き抜くためには「自ら考え、柔軟に判断し表現する力や協働で新しい価値を創り上げる力」が必要であると言われている。その力を育む手段の一つとして、即興を活かした音楽づくりが有効であると考え、実践した。手立ては以下の二つとした。①音楽の諸要素や仕組みを実感を伴って理解するための体を動かす活動
②既存の曲から音楽の特徴や要素を捉え、自らの音楽づくりにつなげるための即興的な表現エク

ササイズである。リゲティ作曲の《ムジカリチェルカータ》というピアノ曲を取り上げ、実践した。

論文の内容

1 はじめに



音楽づくりで身に付けたい力のイメージ

2 授業計画と手立て

授業計画

1次① ①は時数	音楽の仕組みや表現の面白さを感じ取って聴く。 「リゲティの頭の中をのぞいてみよう」 ※ゲストティーチャーによる演奏(以下 GT)
2次②	音楽を特徴づけている要素や音楽の仕組み等を生かした即興を行い、その曲の特徴を捉えて、よさや面白さを味わう。 「曲を分析し、真似してみよう。」 ※GTと共に
3次③④ ⑤⑥	「ムジカリチェルカータ」を聴いて学んだ音楽の仕組みを活用し、音楽づくりをする。 「リゲティ風の作曲にチャレンジしよう。」

手立て

	《ムジカリチェルカータ》の特徴	体を動かした理解の手立て	即興あそびの表現エクササイズ(鑑賞の際、曲を部分的に抽出し、実践)
I	・ラの音のみだからこそ感じ取れる表現の豊かさ。 ・呼びかけとこたえ。 ・音の重なり方。 ・速さの変化の面白さ。	・手拍子で、1小節に入れる音を増やしていく。 ・原曲を聴きながら、低い、中庸。高いと、音の高さに応じた動きをしていく。	・1音選び、1小節に入れる音の数を増やしていく。 ・ラ(A)の音でGTがオスティナートを演奏し、そこに、2人組の児童がラの音で呼びかけとこたえを演奏する。
III	・リズムの変化・発展。 ・ABAの形式。	・テーマとなるリズムが出てきたら立ち上がる。または手をあげる。	・GTにⅢの左手部分を弾いてもらい、テーマが様々な音程で変化するのを、ボンゴとコンガで表現する。 ・ABAの流れで即興を組み合わせる。
VII	・2層構造。 ・フレーズ感。	・全体で円座になる。オスティナートは全員が手をひらひらさせる。スカーフを持った児童が旋律に合わせ、スカーフを動かしながら円の周りをまわる。 ・スカーフを持った児童は、フレーズの切れ目であると思われる部分で、スカーフを別な児童に渡す。	・オスティナートをGTが演奏。それに合わせて児童が鉄琴で即興を行い、ひとフレーズ毎に即興する児童を交代する。

それぞれがどのような時代であったのかを考え
た。想像図で見つけたことを画面や図などに指
を指しながら発表するのが、従来の授業である。
1人1台端末では、個人の考えを全体にすぐに共
有できる強みを活かし、スプレッドシートに一覧
として示しクラス全体で見つけたことを共有した。
その後AIテキストマイニングを用いて、クラス全
体がどのような言葉に注目したのか、縄文時代と
弥生時代の違いがどこなところにあるのかを示し
た。

縄文時代にだけ出る	縄文時代に多く出る	縄文時代に多く出る	弥生時代に多く出る	弥生時代にだけ出る
骨組み 石 掘る 焼く 動きやすい 新しい 涼しい 無い 茶色い 深い 長い 魚 穴 自分たち がわら 縄 道具 編む 運ぶ ぼる 分かる 焼く 煮く 遊ぶ	大きい 狩り 鹿 犬 干す 獲まえる	白い 器 作る 多い 魚 わら 動物 屋根 食べる 藁 土器 食べ物 できる 違う 白い 器 服 作る 住居 とる 器 作る 狩る	建物 縄文時代 布 木の葉 物 ワンピース 船 持つ 器 時代 主 取る 住む つける	お米 食器 川 変わる 井戸 米 っぽい 涼い 下 増える 流れる 3段階 やぐら 上半身 水磨 田んぼ くむ いい でのい 小さい 美味しい 長い 高い 入り口 薪田 専 備 庭 稲穂 青

③算数科での活用場面

山梨県の面積を求める問題を児童にスライドと
して配布し、求め方や式などを記入した。地図
の縮尺を活用できるよう縮尺を1cm=10kmとなる
ように画像の大きさを調整したことで、画面に線
引きを当てながら求める姿があった。



④各係

クラス新聞に何を書いてほしいのかを学級内
にアンケートを行った。ドキュメントで作成したも
のを家庭で印刷し、学級内に掲示した。担任が
把握していたのは、アンケート段階までであり、

新聞をPC上で作成していることは学級内に掲示
した段階で把握した。このように児童が自ら活
用する場面が非常に増えたといえる。

2 成果

導入前と導入後で同様の内容のアンケートを
行った。「課題の解決に向けて自分で考え、自分
から取り組めるようになった」「自分の考えを發
表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、
資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表
できた」「学級の友達との間で話し合う活動を通
じて、自分の考えを深めたり、広げたりすること
ができた」等の項目において、導入後のほうがで
きるようになったと感じている児童が多い。また
他学級と比較しても、その伸び率は大きかった。

3 最後に

1人1台端末を学校で活用することは、児童の
主体性や情報発信力、自分の考えを深める、人
間関係形成等多岐にわたり力を育成するために
活用できうるといえる。しかし、児童の資質能力
を育成するための活用方法は無限に広がってい
くため、教員の指導力向上、教材研究はこれま
で以上に求められていくことになるだろう。

本稿で行われた実践は、Google、信州大学佐
藤和紀先生、常葉大学三井一希先生、静岡市
教育センターの支援と協力を得ました。